令和五年七月七日　稲枝地区公民館福寿大学

二十歳の直弼、江戸へ行く

彦根城博物館
渡辺　恒一

はじめに

井伊家十三代当主井伊直弼（一八一五―一八六〇）。井伊直中の十四男として、文化十二年、槻御殿に生まれる。十七歳の時、弟直恭とともに尾末町御屋敷に移り、三十二歳の弘化三年（一八四六）に彦根藩世嗣となり江戸に出るまで暮らした。その間、天保五年から六年の一年余り、他の大名家との養子縁組のため、直弼が彦根を離れ、江戸で過ごした。本講座では、直弼の旅日記「露分衣」と、直弼の手紙により、この時の直弼の様子や心境を紹介する。

一　直弼の旅日記―「露分衣」―

・「露分衣」。竪帳一冊。直弼自筆。推敲本が井伊家に伝来。現在、彦根城博物館蔵。上之巻（彦根から江戸への道中）、中之巻（江戸滞在中）、下之巻（江戸から彦根への道中）から構成されている。江戸から帰国後に作成したと考えられる。

【史料一】
（表紙題箋）
「つゆわけころも」

露分衣　　上之巻

（七月五日、彦根出立）

つとめてあかつき起出て。夜への取みだり置つるものなンど。かたへによするほとに。日ハトクのほりぬ。いといそがはしくて家の子らをもセきやりて。辰のときばかりに。柳王舎を出立つ。駕といふものにのりて出たつなりケり。ミ地すこし行□とすれハ。そぞろに日こそくるれ。爰にやどりなんと人々のいふニまかせて。家もとめて入ば。あなかま立かふに。飯くひ湯あみなどしつつ枕するほとハ。夜ふけぬらん。そこうもしづまりて。思ひでいでられつること多し。すぎにしミなつ月つもこりの日。ゆぐりなれも。東へなるせうとの君□□□よりとみのこととて御文たまはり。いそき東ニモノセよとの仰をうけたまハりて後。けふ**文月五日**といふ日までに。からうしていそきしぬるハ夢のやうなりけり。今朝出立をりしも。**鳥井本**。**馬場**。**醒井なと**の駅まて。見おくりする人々のありしに。因幡の山のミねの松ともいはで。こゝろつよく別れしハ。いともくちをしきわさなりかし。まだ一夜をだに草枕せしことなき身なれハ猶はしたなき事のミ多くソ□り。けふのことそぞろこゝろにてハ。行末いとおぼつかなきを。こよひこのやどりを我舎とおもひなして。あすことさら旅たちせんとひとりこちて。ふしぬれどいもねられず。

（七月六日）

六日。夜辺もいへりしこと。けふことさら旅たつ心地にて。この**赤坂**を出るとて空晴たり

ければ　朝日かけ　あか坂のやどを　旅衣　末はるばるとおもひたちけり　**くびせ川**といふ河を舟渡りす。それより**美江寺**といふ駅をもすぎ行ニ。又河に至るを問い、いつぬき川といふ。さらハ清少納言が。川ハといふに。貫川とかきしも。此河なるらんかし

末遠く　きつゝをゆかん　たび衣　いつぬき河そ　おもひやらる

【中略】

(七月十七日、江戸到着)

※十七日　つとめて立出つゝ。高田といふところにてやすらひ。皆そうそくなどつくろひて。駕にうちのり。一ヵ谷といふ所をハる。雨いさゝかふるに。笠とるとらずして。外桜田の御館のうちなる。弥御館につく

弥御館ニつきぬ

つゆわけ衣　　中之巻　　(天保五年七月十七日〜)

かくてつきぬるよし。きこへたひまつれバ。とくまうのぼれとの仰に。旅衣ぬきかへて。御前に出ぬ。いとこまやかに仰事蒙り。なほふるさとのことなど。伊豫のゐげたのかすかすせちにとひきゝたまふに。とにかくにあつさたへかとう。道おそかりし。罪のかれかたう。かしこまりてなんきこへたいまつる。ことをはりて母君住せ給ふ。新御館にもまうのぼる。よろつ仰ことを給はりて。けふはまかてぬ。

二夕日。三日のうちハ公事しけくて。こと事にはこころおかでなんすぎける

(七月)廿一日には。古郷のたよりありといへば。したしきかぎりハ。ふみかきてつかはしぬ。このほどハ彼板橋の夜あづしかりしもうちわすれをりしが。身にいとまのいてきにけれバにやあらん。はた思ひいでゝ。こたみハワらは病となりぬ。さて住ける所ハ。御館のうちニても。べちのかまへして。家のうしろは。定ながくあけわたし。外さまなる道そ見えける。ここをさいかちが下とハいふなり。向ふに築地いと高くかすみたるなん。西の御丸なりける。さる前なる道行かふ人ひきもきらず。大御城にまうのぼるますらをども。多きなかに。力車をひく事七車にして。これも朝戸をあくるよりし暮るまで。たゆる間もなく。ことにあやしき声かくる事こそかしがましかりしが。すこしハ耳馴ぬ。ミなみむけにハ。いと広しかなるにはつくりなし給ふてける。されど常々人しすまねバ。池には水くさしげく。かたへの山の高きひくきに。すゝきむり立にけれは。虫どものこゝらすだくなん。いとおかし

八月二日といふには。古郷より文つきて。夢のねのながきも今ハたひ路も今ハつゝがなく送りたらんこと。たとしへなく□んなど。いひこせたりき。このつきなかばになりて。病やうたひらけくなほり。十五夜のよい。ひと〳〵つとひつゝ歌よみける。月いとよし

〇あふみの海　たなゝし小舟　こぎ□けて　めつらん

つきを　東路に見る

〇むさし鐙　かけさやかにも　すむ月を　ふるさと

にしも　おなしこと見ん

(八月)十七日。上野の東叡山ミやまに詣つ。けにも〳〵たうとくありかたかりし霊地にて。山門より御ありかまでの。ひろきことえもいはず。これより浅草寺に詣。いとふるき世より爰をしめ給ふ観世音にて。誓ひもいちしるく。けふは御縁日にさへあなれば。ことさら詣つる人多く。ワかきも老たるも。御堂のはしをめぐる音なす。御堂もさながらくづるゝやうに聞ゆ

（中略）

（八月）廿四日にハ。さきつ頃より仰事ありし。おのれかおとうとなる直恭ぬし。日向延岡なる内藤家へ養子のこと。けふとゝのひて館ハ虎門といふところにあ□るかそれにうつり給ふ。これがよろこひきこゆる人多し。

○八月二十六日

千駄ヶ谷屋敷に直亮の供で赴く。

○九月九日

月見

○九月十八日

夜中の火事の記事

○九月二十六日

亀井戸の天満宮参詣。羅漢寺など参詣

○十月十八日

高田の御園に逍遙し給う。母君も渡られる。

○十月二十一日

申楽の会かうし給ひ。めし出されて見たまへるに。むかしハ見しことありしもの□□。いとひさしうなりにたれば。ことに興ふかうておもしろし。

○十一月二十日

陸奥国よりの馬見分。

彦根に較べ冬ながら晴れる日が多い。

○十二月一日

召し連れ江戸に下った二人が彦根に帰国。餞に酒を飲む。

○十二月二日

大御城より上使。雁下付。

○十二月二十日

申楽の会あり。

○天保六年正月五日

火事の記事

○正月二十日

数寄屋橋に暮らす姉が死去

葬列を館から見る

○弥生三日

新御館には、ひいなの棚ことごとしうしつらひたまふ。

○三月七日

芝増上寺へ参詣。泉岳寺。四十七士の墓。如来寺。

○三月二十二日

申楽の会

○三月二十七日

隅田川の桜見物

〇四月
母君御心地例ならず。
209
〇五月
古郷の音信は月二度。古郷なる笹の屋の翁がみまかりぬといひおこせたり。こは年ころ和歌の師にて。ふるさとにては。しきしまの道ふめるもの。この翁のかけに□らずといふ事なく。いとをしさふばかりなし。
〇五月七日
少将君（直元）うつき二十六日に彦根出立。
巳のとき頃に御館入り。
〇五月十日
会津の君をまろうとざねにて。申楽の会かうし給ふ。
〇五月廿三日
謙々亭てふ御園に逍遙し給ふ。ときめきたまひしぬしのみそのなるを。それうせたまひて後しめ給し。
〇五月二十五日
大御父君の御忌日。
〇五月二十六日
母君平癒
〇五月二十七日
豊後岡の君（＝中川久教）をまろうとにて申楽かうしたまふ。
直亮から舞うことを求められ、直弼の鼓により、中川が「融」を舞う。
〇六月十五日
山王権現の祭礼。参詣
〇六月二十三日
上屋敷ニ来た直元と物語する。
215
〇七月七日
さてこのほど人して仰こと蒙りけるは。おのれここにくだりてより。はや一とせにもなりけるを。いでやふるさともゆかしからん。おほやけもことをはりしほどにとて御暇たびけり。なほ夏のなこりあつし。いますこし秋風ふきたちなん時こそよからめと。
〇七月二十九日
豪徳寺参詣。千駄ヶ谷屋敷の萩の様子を見に行く。
八月二日
赤坂中屋敷に暇の挨拶
八月四日
本庄にすませ給ふ君の御館にも挨拶。
八月五日
御餞として申楽をかうし給う。直弼、芦刈の舞を打つ。神田橋虎門にも姉君に暇の挨拶に行く。
八月六日

雨のため直亮から出立を延期するように勧められ、延期。

八月九日

夜に直亮に召し出され、盃下賜。唐の御硯を賜う。

(八月)十日。あすハ出立てんとてもうくるハ。古郷をたちしときのごとハあらねど。いといそがはし。まづ御暇つけ奉らんため。衣などあらためてまうのぼるに。新館に出させたまひ。朝な夕な野ほたちてはた寒からんをり〳〵。いとひてゆきね。ふるさとにて。なにがし〳〵にもセうぞこきこ江よと。のこるかたなうのたまひて。巻物などかつけ給ふ。すべて去年こゝにくだりしより。よろつなにかにつきてもふかき御こゝろばへ。こたみ出たつきはみにも。数々の御めぐみの露。かゝる身のよろこひを。やう〳〵かたはしきこへ奉りて。こゝろのうつにおもひつづけケる。

おふけなく　ふかきめぐみの　露の玉　まなくもうけぬ袖のせまきに

それより新御館にもまうのぼりてまかり聞へ奉るに。いたくワかれををしみたまひ。よろつにくはしうのたまハセて。かす〳〵のろくたまひ。なほ御薬そへて。大御歌をさへたまふ。つね〳〵いとかしこきおほんおほエ。いまさら身にあまりて。大御歌見奉るに。あふみの名を頼ミおほしおきて給ふやうによみなし給へば、御返しとて

（中略）

露別ころも　　下之巻

八月十一日

江戸出立、彦根への帰国の旅路につく

（東海道）

八月十九日

尾越泊

八月二十日

醒井泊

八月二十一日

けさつとめて立出。すりはりのたむけにのぼりてやすらふ。さるは望湖堂なり。あらし吹おくるに。湖のけしきもめづらかにて立かへり　また見渡ば　よる浪も　なみ〳〵ならぬにほの浦風　これくだりて。鳥井本の駅にてまたやすむ。むかへのひと〳〵あまたなり。みな〳〵ともなひてきり通しこゆるころ。れいの雨ふる。おもへバ去年もことしも秋の節なるに。こたみは雨さへいたうふりつづき。ケふしもなほふりぬれば。いとと袖のぬれし上にぬれて。かワかぬ上にかワかねども。むさしの露に。めぐみのつゆをおき添たれば。この露わけ衣ぬぎやはおくとて。やがて柳王の舎にいつきぬ。さておのれつつがなかりしよりは。めしつれしひと〳〵。すぎにし秋。旅立てより。ケふ天保六とせの八月廿一日といふ日まで。すでにひとゝせあまり。よろつたのもしかりしよろこひ。ケふみな〳〵さはることなうつきぬる・いはんかたなくうれし。いでや八重葎のには見わたさんとて。まどひきあわるに。やなぎの稍しげりあひて。さる法師の。あれし軒端にこけむして。思うほどには月もをラぬといひし。おもひ出らるるに。おのれは　おもふには　のきのやなぎの　いやしげり　旅になれこし　つゆの玉見る　かくてしばし日はふれども。なほ旅たどるここちぞ。やまざりける。

二　江戸滞在時の直弼の手紙

【史料二】

彦根藩井伊家文書２４６７８　河西精八郎宛て井伊直弼書状

（天保五年）八月六日　※書き下し文

尚々、元祖直筆の一紙は得と考見致し終え候間、一封に返進候。落手給うべく候。私も今少し其表にて修行致したき存念の所、是のみ残念に存じ候。猶段々工夫の義も御座候間、其内序でを以て申し入るべく候。久之進殿にも宜しく御伝声頼み入り候。尤も御修行油断なく□存じ候。

残暑の砌、弥御情勤目出たく存じ候。然れば私事其表出立後、先ず滞りなく旅行致し候えども、兎角極暑の時節少々不快にも候上、供の内にも申し事出来致し、次第後れに相成り、先月十七日、着府致し候。尤も、着後は何れも快方に御座候間、御休意給うべく候。扨、其表にては多年御世話に相成り候義、斯く遠路隔て候後は、猶以て日々に存じ出され、忝く且つ床しく存じ候。誠に発足前は新心流大切の一巻并に元祖直筆の一紙授け給わり、是れ又格別の存じ寄り忝く存じ候。兼ねて申し居り候通り、此道は暫くも捨て難き事に御座候間、何国へ参り候共、心の修行怠け申すまじく候段、是れ又承知給うべく候。又々参会の時有るまじくとも計り難く候えども、発足前も余り取り込み、得と御礼申し入れず候間、一寸見舞旁此くの如く候。不備

八月六日　井鉄三郎

河西情八郎殿

【史料三】

彦根藩井伊家文書２４６７９　河西精八郎宛て井伊直弼書状

（天保五年）九月六日

光陰押し移り、既に深冷催し候折柄、愈御別条これ無く御起居の段大悦致し候。先便には早速返簡成し給り忝く披見致し候。尤も当道一流建立の義など申し越し給わり、誠に予本意に叶い候義に御坐候。実に以て不才の生質、厚き御世話に依り、少々弁え候段は日に増し月に添え忘れ難く恭き次第に御座候。何卒一生涯に今一度の対面得と御礼申し入るべく候。扨此の一封の書物慰みにも相成るべく候やと存じ候間、御見せ申し入れ候。

一、居相名目の説書、此書は其表出立前に本多孫六郎伝え申し候。一向一通りの義に御座候間、御見せ申し候程之物には中々御坐なく候えども、何かと御工夫の一助にも相成るべく候やと存じ候間、御見セ申し候。

但し、一条ずつに細かく写し候は、予が注を加え、善説・悪説分け置き候間、是れ又写し、御慰みに御見せ申し候。心得違い等も御座候わば、仰せ達せられ候。

一、出立前に受け給わり候入門巻、当時隙に罷り居り候間、段々熟見致し候所、中々愚意

に察し難く候えども、聊か其妙を弁え、且予が趣き候本意ニ能く叶い、誠に尊く感心致し候。其地（＝彦根）にも居り候わば、猶御相談も申し入るべきに、当方（＝江戸）に居り、其の儘指し置き候も書物の功を隠すに候間、少々弁え候所、中にも尊く存じ候詞など一紙に写し御見せ申し入れ候。

二

右、三品此の度御見せ申し候。尤も御戻し成され候には及ばず候間、左様御心得頼み入り候。但し、何れも乱筆の段御断り申し入れ候。御察読の程頼み候。猶又兼ねて申し居り候柔術の一巻、同□巻など大抵出来致し候間、近々重便御見セ申すべく候。右等申し入れたく、猶次第に寒気に近き候間、何分〳〵御自愛専一に存じ候。先ずは早々不備。

九月六日認　　井　鉄三郎

河西情八郎殿

【史料四】

彦根藩井伊家文書２４６８９　河西充信宛て井伊直弼書状

（天保六年）三月二十日

漸々暖気相催し候えども、兎角不順の時候の処、弥別条これなく、目出たく存じ候。扨旧臘も申し入れ候通り、当春は早速にも書物出来致すべく候所、例年春は持病気にて相困り、当年も先頃は不勝の気分に付、大延引致し候。只今には随分と快方に候間、必ず安事致すまじく候。中々等閑に打ち捨て置き候にはこれ無く、右の次第、且つは跡より迷い認め置き候ても又理は叶い候とも業には叶わず、殊には古流の意を失う事もやと存じ候えば、日夜工夫に日を送り申し候。実に以て余の義には違い、後に人の批判もこれ有る義に候間、誠に大事に心懸け候。何れ近々には清書致すべくと存じ居り候えども、又々分別も出で申すべきや計り難く、大抵は究めを付け申し候。余り長引き候間、ことわりのため一寸申し入れ候。弥々修行懈怠これ無く候間、左様御承知給うべく候。不備

弥生廿日認　　藤原直弼

（河西）充信先生へ

おわりに

・江戸での経験の結果

帰郷してから四ヵ月後、抜刀の武術である居合の新流派の極意を述べた「神心流居相表之巻」を著した。同書では、従来の居合が心の部分を軽視していると批判し、人と人とが対すること全般を含めたものとして居合を広く捉え直し、「柔居相」という考えを主張。

「柔」とは、相手をよく知り、臨機応変にしなやかに対処することをいう。

〈柳を見るべし。風にも折れず、雪にも折れることなく、万代朽ちずして翠ますます栄えをなす。予、軒に植えてこれを観るに当門の妙場（すばらしい境地）ただこの一樹にあり〉

強くしなやかな柳の姿に、他者と対する時の心の保ち方の理想像を見たのである。

井伊家文書
古文書学
28161
昭和53～57年度
彦根藩文書調査